

「ワイルドと新しい女」の要旨

新谷 好

ニール・マッケナは、ワイルドについて「革命的なスペランザの真の息子として、彼は女性の権利の恥じない擁護者であり、女性は何の点から見ても男性同様に知的であると思った」と述べている。また、ワイルドが結婚したコンスタンスは、女性リベラル協会の会員で、女性の参政権を支持しそのために尽力している。また、『ウーマンズ・ワールド』にワイルドが寄稿を依頼したヘレナ・シカートは、ガートン・コレッジで学位を取得した「新しい女」で、女性の権利のための擁護者であった。このように、知的な女性との交友関係もあったワイルドが、イブセン劇の波紋の中で描き上げた「新しい女」は、究極的には、母親スペランザの女性観を踏襲しているように思われる。以上が、今回の発表の骨子であるが、ここではワイルドの描き上げたサロメなどの「異国風の女」は「新しい女」の中には含めていないことをお断りしておく。

まず、「新しい女」誕生までの「新しい」女性像の変遷を簡略に見ておきたい。最初に「新しい」女性を取り上げたのは1868年の『サタデー・レビュー』で、「当代の女性」として紹介したが、この種の「新しい」女性は、髪の色を染め、顔に化粧したらしい。ワイルドは、『理想の夫』のチーヴリー夫人をそのような女性として登場させるつもりであった。というのも、ゴーリング卿の削除された台詞に「髪の色を染める女性の場合は、その性は挑戦であって防御ではない。個人的には、私は髪の色を染める女性に敬服する。」がある。

次に1888年の『マクミランズ・マガジン』で「美化された独身女性」が取り上げられたが、この「美化された」「新しい」女性は、結婚を女性の宿命と考えず、独身主義を通し、教師、看護婦、事務員などの職業に就こうとした。やがて、1891年に反婦人参政権拡張論者のイライザ・リントンが「放埒な女性」という表現を一連の記事の中で使い、公衆の面前で脚を出す「進歩的な」女性を非難した。ワイルドの『理想の夫』(1895)に登場するメイベルは、まさしくこの種の女性で、彼女は「活人画」の中で逆立ちする。

やがて、バーナード・ショーは『イブセン主義の真髓』(1891)を出版し、『女たらし』(1893)で喫煙し自由恋愛を標榜する女性を登場させ、『ウォレン夫人の

職業』(1894)で自転車に乗る知的な女性を登場させた。このショーを皮切りに、アーサー・ピネロ、アーサー・ジョーンズは、『第二タンカリー夫人』(1893)、『悪名高いエップスミス夫人』(1895)、『反逆するスーザンの事件』(1894)を上演し、男性遍歴の後に結婚して継娘の母親となる第二タンカリー夫人、女性解放を訴える過激な演説家のエップスミス夫人、結婚を「あさましい制度」と見なし反逆するスーザンを創造した。特にシドニー・グランディは、正しく『新しい女』(1894)という劇を書いて、女性解放を訴えるインテリ女性を数多く登場させ、男女の「性」の本質から逸脱した「新しい女」とダンディを「新しい性」として嘲笑したが、この94年に「新しい女」という洗礼名を与えて流行させたのは、ウィーダと論争したサラ・グラントである。

さて、教会の結婚式で「従います」を宣誓したくないため届出結婚で済ませた「新しい女」がいたが、『カンターヴィルの幽霊』(1887)に登場するアメリカ人女性のヴァージニアは、老ビルトン卿とハイド・パーク2周の競争で子馬に乗って勝ちを取める「素晴らしい女傑」である。しかし、彼女はチェシャー公爵と聖ジョージ教会で結婚式を挙げている。このように、ヴァージニアは男性的側面を有しながら、結婚、妻、母の伝統的な女性の役割を受け入れる女性として描かれている。このような女性は、「タナグラ小像」に譬えられ、『模範的な百万長者』(1887)のローラ、『アーサー卿の犯罪』(1887)と『ドリアン・グレイの肖像』(1890)の女主人公シビルと同系列の女性である。この種の女性に「神秘性」が加わると、『アルロイ夫人』(1887)に描かれる女主人公となる。ベールを被った喪服のアルロイ夫人は、架空の街カムナー・ストリートに間借りする「神秘的な」ジョコンダであるが、手紙の宛先を「ウィッテカー図書館気付けノックス夫人」としているところから、中産階級女性の新種の職業である図書館員の可能性もある。

この『アルロイ夫人』の発表当時に、ワイルドが手を染めた劇作『妻の悲劇』がある。断片的な草稿しか残っていないが、ワイルドの創作意識の片鱗を垣間見ることができる。この未完の劇の主人公ジェラルド・ラヴェルは、「炎となって燃えること——それが人生の秘密である」と発言する著名な詩人で、愛する妻のネリーがいるにもかかわらず、彼の詩的理想を体現した「新しいアフロディテ」のような伯爵夫人ピアトリーチェに恋する。そのため、ネリーは夫のつれない態度に幻滅し、最終的にはヴェラのように、「私も結局ただの普通の女だわ」と悟って、夫の親友であるアーサー卿と駆け落ちする。それに反して、伯爵夫人は、財産目当ての結婚をした女性で、ジェラルドを見限って、金持ちのアーサー卿と

の結婚を画策する「女山師」のように描かれている。『書簡集』の中で、アーリン夫人は「女山師であってココットではない」とワイルドが述べるように、このような「女山師」がワイルドの作品には頻出している。

このように、この未完の劇は、ワイルド特有の愛と「義務」の相克をテーマにしている。そう言えば、『ウィンダーミア夫人の扇』（1892）に登場する女主人公も、夫がアーリン夫人に浮気したと思ひ込み、結婚生活に耐えられなくなって、ダーリントン卿と駆け落ちを決意する女性である。それに反して、アーリン夫人はそのような過去の過失を悔いることはない。『何でもない女』（1893）のレイチェルも、「宗教的な」女性の仮面を被りながら、決して罪を悔いたことのない女性である。彼女は、「純潔」よりも母親となることを望んだ女性である。このような女性の究極の姿は、アロンビー夫人像の中に集約される。彼女は、夫アーネストの生真面目を槍玉に挙げ、「理想の男性」論を展開し、男性優位の因習的な考えを痛烈に皮肉り、既婚女性財産法案への言及を織り込んだ台詞「すべて男性は既婚女性の持ち物ですわ。……でも私たちは誰のものでもないの。」と述べ、男性に束縛されない自由な「新しい女」の立場を強調する。そして、『理想の夫』のチルタン夫人は、「女性リベラル協会」に所属し、ダンディのゴーリング卿と親密である。というのは、「新しい女」とダンディが1890年代の人々の中で「新しい性」の男女として位置付けられたからである。しかし、ここで注目すべきは、ワイルドの自己投影的人物であるゴーリング卿がチルタン夫人の誤りを悟らせる時に述べる台詞である。ゴーリング卿は、「女の人生は感情の曲線を描いて展開する。男の人生が進展するのは知性の線上である」と説諭する。また、ワイルドの最後の風習喜劇『真面目が肝心』（1895）は、「新しい女」を風刺する茶番劇である。セセリーも出版を意図して日記を書き綴り、グウェンドレンに至っては「大学エクステンション講座」に出席する「近視眼の」インテリで、「家庭が男性にとって適切な領域のように思えますわ」と公言する。また、女家庭教師のプリズムも「三巻本の小説の原稿」を書き上げたことから明らかなように、女流小説家を目指している。

以上見てきたように、ワイルドの描く「新しい女」は、代表的なチルタン夫人のように、夫の過失を許す従順な妻の役割に甘んじていると言える。このような女性観は、母親譲りであったと思われる。ジョイ・メルヴィルは、ワイルドの母親について「女性の権利の要求にもかかわらず、ジェーンは女性の義務も信条とした。彼女は随筆『勝利者ヴィーナス』の中で、女性は共感と愛で夫を援助するが、その返礼として何も男性に要求しない救いの人であるべきであると論じた」

と記述している。確かに、スペランザは、その随筆の中で、女性が知性と社会的威厳を獲得し、男性のように自由な服装をし、口にシガレットをくわえようとも、女性は義と真理のためにその心情を発揮して「人類の真の天使」となるべきであると力説している。つまり、スペランザは、男性への共感と犠牲が女性の本能と信じるために、「愛することは最も高貴な魂の最高の喜びであり、女性を天使の性質にまで高揚させる」と断言するのである。

一見、ワイルドはラディカルに見えるが、反逆児でもなく、順応主義者である。この順応主義者であるワイルドの態度は、彼がアメリカ女優エリザベス・ロビンズに示した態度にも垣間見られる。リチャード・エルマンはワイルドがロビンズの「恩恵者」であると見なしているが、ケリー・パウウェルはそのような見解を修正している。パウウェルによると、アメリカ女優のエレナー・カルフーンがロビンズのロンドンデビューのために役を譲ろうとした際に、ワイルドがピアボーム・トリーとそのハイマーケット劇場の素晴らしさをほめ、その役を断るよう薦めたが、彼女に提供された仕事は、わずかにハイマーケット劇場での代役にすぎなかったらしい。しかも、ワイルドは、ロビンズの「未来劇場」のために弁じ著述すると言ったにもかかわらず、その約束を実行していない。